ＣＨＯＳＨＩ（第１４話）

単独チーム結成の３日後の６月４日。清真学園高校野球部は鹿島学園のグランドで行われる県東地区大会に出場した。１回戦の相手は古豪鉾田一高。

グランドに行くと昨年甲子園に出場した体格の良い鹿島学園の選手達が、完璧なグランド整備をしていた。結成間もない清真学園の選手１１名は、おどおどしてしまい、場違いな感じさえした。

鉾田一高のノックが始まる。洗練されたノックを見て、完全に雰囲気にのまれた。１回の守備。川口（弟）の投球練習が始まると、球場はシーンとなり、鉾田一高そして鹿島学園の選手達も川口（弟）のボールに注目した。

川口は中学時代よりも球速を上げていた。ＭＡＸは 130km/h を超えている。しかし、いきなり先頭バッターに打たれてしまう。そして、むきになってボールがうわずり暴投を続ける。制球が定まらない弟に、キャッチャーの兄も打つ手がない。というより兄も初めてのキャッチャーとしての試合なので、弟を気遣う余裕もなかった。

バッティングも冴えない。新たに加わった高校３年生の３人は、力んで凡打を繰り返した。試合は大差になり、５回コールドで清真は負けた。結成３日後なので、この結果はある程度見えていた。むしろチームとしての弱点がはっきり分かったことが収穫だった。ここから１ヵ月、久しぶりのチーム練習、そして週末には練習試合が続き、チームは徐々に活気づいてきた。

川口（兄）の高校野球最後の１ヵ月はキャプテンとして、５年分の濃密な時間を送った。同じ目標に向かう６人の高校３年生に囲まれ、慣れないキャッチャーの練習、配球の勉強、エースである弟への指示など、様々なことに考えを巡らせる１ヵ月になった。

また、夏の大会が声を出してはいけないが、応援団・チアガールそして生徒応援も解禁になり、夏の風物詩が帰ってきた。

夏の大会の組み合わせが決まった。１回戦の相手は下館工業。秋・春共に地区大会を勝ち抜き、県大会に出場している。特に秋は県大会の１回戦、古豪水戸工業に競り勝ち、ベスト１６に進出している。

『もう少し弱い相手だったら、いいゲームになったかもしれないが、この相手では、コールドにならず９回戦えれば上出来だろう。』押見は日に日に高校球児らしくなっていく選手達を見ながらそう思った。